

令和 5 年 4 月 24 日現在

機関番号：23201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K12393

研究課題名（和文）認知症の人と家族の映像を導入した専門職連携教育プログラムの開発と教育効果の検証

研究課題名（英文）Development of an educational program for professional collaboration using videos of people with dementia and their families, and evaluation of its educational effectiveness.

研究代表者

竹内 登美子（Takeuchi, Tomiko）

富山県立大学・看護学部・教授

研究者番号：40248860

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,600,000円

研究成果の概要（和文）：認知症の人と家族のビデオ映像を導入した個人学修用教材と、ワークショップ用教材で構成した「Web版の多職種連携教育用プログラム」を開発した。

多職種専門家に実施し事前事後のアンケートを比較した結果、1. 多職種連携コンピテンシーでは「関係性に働きかける」以外の3項目において事後の方が事前調査時よりも有意に高く、本教材の効果が示唆された。2. 用語の検討では「不穏」と「性格/人格が変わる」が事後調査で不適切という回答が増え、有意な傾向が認められた。質的分析では、【当事者の人権が守られる社会】【地域が主となって認知症の人を支える】が新たに抽出され、当事者の人権や地域についての思考の深まりが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本教育プログラムの実施によって、認知症の人と家族の体験に伴って生じる感情や思考に共感し、行動の理解が深まることが予想され、当事者の視点を踏まえた援助に繋がると考えられる。および多職種が集って教育プログラムを実施することによって、各専門職による考え方の特徴や強み、多職種連携の課題が明らかとなり、新しい多職種連携教育プログラムを提示することができる。

本教育プログラムの活用によって、医療福祉に関する専門職の認知症ケア力を高め、認知症の人も家族も充実した生活ができる社会の実現に寄与するという意義がある。

研究成果の概要（英文）：We developed a web-based interdisciplinary educational program consisting of individual learning materials with video images of people with dementia and their families and workshop materials.

As a result of comparing pre- and post-questionnaires conducted with multi-professional experts, 1. In terms of interprofessional collaboration competency, three items other than "working on relationships" were significantly higher after the test than during the preliminary survey, suggesting the effectiveness of this educational material. 2. In terms of terminology, "disquiet" and "change of character/personality" increased in inappropriate responses in the post-survey, and a significant trend was observed. In the qualitative analysis, [a society where the human rights of people with dementia are protected] and [the community plays a central role in supporting people with dementia] were newly extracted, suggesting a deepening of thinking about the human rights of people with dementia.

研究分野：老年看護学

キーワード：認知症 多職種連携 教育プログラム 教育効果

1. 研究開始当初の背景

本研究は2009 - 2016年度に実施した基盤研究(B)と(C)の成果として研究者らが構築した「認知症の語り Web サイト <https://www.dipex-j.org/dementia/> 2021年7月更新 Ver.」の中から、葛藤や困難、生活上の不都合、自己変容などを映像で語る事例を厳選し、それらを活用して、開発した多職種連携教育プログラムの効果を明らかにすることが目的である。開発した教育プログラムを認知症ケアに関わる多職種専門家に提示し、個人学修とグループ討議を通して、「認知症の人と家族の理解」や「認知症の人の人権」、および「認知症に関する多職種連携の実践」等に関して検討し、学修の効果を明らかにする。

本教育プログラムの実施によって、認知症の人と家族の体験に伴って生じる感情や思考に共感し、行動の理解が深まることが予想され、当事者の視点を踏まえた援助や人権尊重に繋がると考えられる。および、多職種が集って教育プログラムを学修し討議することによって、多職種連携を強化することに繋がることが期待できる。また、本教育プログラムの活用によって、医療福祉に関与する専門職の認知症ケア力を高め、認知症の人と家族が充実した生活ができる社会の実現に寄与するという意義がある。

2. 研究の目的

認知症の人と家族の映像を導入した多職種連携教育用プログラムの開発と、それらを活用した教育効果を明らかにする。

3. 研究の方法

1) 研究対象者と研究協力依頼方法

病院、施設、薬局など様々な場において、認知症ケアに関わっている保健医療福祉の専門家を対象としてスノーボールサンプリング法を実施し、参集した15人を研究参加者とした。なお、現在認知症ケアに関わっていない者と未成年者は除外した。

2) 調査内容

個人学修前と学修後の調査

- ・学修前の調査： 「多職種連携コンピテンシー」に関する7項目について、5段階のリッカート法 認知症の人の困りごと及び前向き姿勢に対する自由記述、「暴言・暴力」「不穏」「徘徊」「介護拒否」「性格/人格が変わる」という用語の適切性に対する質問と代替用語の提案、専門職に求められていることについての自由記述
- ・学修後の調査：事前調査と同じ ~ に加えて、「教材学修後に感じ考えたこと」を自由記載ワークショップ後の調査
- ・事前調査と同じ ~ に加えて、「多職種とのグループワークを通して得られたこと」、及び「本教育プログラムについての意見」

3) データ収集方法と実施日、データ分析方法

調査の質問はGoogleフォームを用いて作成し、常時SSL化してセキュリティを確保した。複数の質問は分析過程で比較や統合する必要があるため、事前に決めたIDを記載してもらい無記名とした。2022年12月に実施し、質問表の数字データは記述統計及び推測統計、自由記述は質的帰納的分析を行った。

4) 倫理的配慮

同意書が返送されてきた者を研究参加者とした。Zoomで顔を出して討論・意見交換するため、録画や録音はできない設定とし、誹謗中傷はしないこと等のマナーを事前に伝えた。また、成果発表時には全ての個人識別情報を削除し、本研究以外の目的にデータを使用しないことを説明書に記載した(当大学の倫理承認番号：看護第R4-9号)。

4. 研究成果

1) 開発した多職種連携教育用プログラムの構成と概要

前述した調査項目 ~ に関するテーマと教材内容について研究者間で検討を重ね、以下に示したPart1 Part3から成る個人学修用の教材と、グループ及び全体討論によるワークショップで構成された教育用プログラムを開発した。

〔個人学修用の教材：40分〕

Part1：認知症の人と家族の思いについて、5人の認知症の人と家族の語りを視聴する。

Part 2:対応に困る言動について、3人の家族の語りを視聴する。

Part3：家族の心配事と本人の意向について、2人の家族の語りを視聴する。

〔ワークショップによる学修：100分〕

WS1：1グループ4～5人で教材を視聴し、感じ考えたことを自由に討討論60分)

WS2：グループ内で出た意見を発表し、全体で質疑応答(40分)

2) 研究参加者

認知症認定看護師5人、看護師、認知症認定薬剤師、介護福祉士が各2人、及び薬剤師、介護支援専門員、社会福祉士、精神保健福祉士が各1人の計15人であった。

3) 事前調査と学修後調査、ワークショップ後の調査結果

〔多職種連携コンピテンシーに関する調査〕

事前調査とワークショップ後について Wilcoxon の符号順位和検定を行った結果、「職種としての役割、知恵、意見、価値観を伝える($p=0.013$)」「経験を振り返り再考することができる($P=0.001$)」「他職種を理解し連携協働に活かす($P=0.004$)」の3項目については、多職種で意見交換した後のの方が事前調査時よりも、有意に高かった。

表1 多職種連携コンピテンシー調査

認知症の人と家族のために職種間コミュニケーションを図り、職種としての役割、知識、意見、価値観を伝え合うことができる	1. 事前調査	0 (0%)	1 (7%)	3 (20%)	6 (40%)	5 (33%)	15 (100%)	0.013
	3. 事後調査	0 (0%)	0 (0%)	1 (7%)	4 (27%)	10 (67%)	15 (100%)	
当事者主体のケアを提供するために、時に生じる職種間の葛藤に対応することができる	1. 事前調査	1 (7%)	0 (0%)	4 (27%)	6 (40%)	4 (27%)	15 (100%)	0.053
	3. 事後調査	0 (0%)	1 (7%)	0 (0%)	8 (53%)	6 (40%)	15 (100%)	
連携協働した経験を振り返り、自身や他者の感情、思考、行為、役割、価値観を再考することができる	1. 事前調査	0 (0%)	1 (7%)	4 (27%)	8 (53%)	2 (13%)	15 (100%)	0.001
	3. 事後調査	0 (0%)	0 (0%)	1 (7%)	5 (33%)	9 (60%)	15 (100%)	
他の職種の思考、行為、感情、価値観を理解し、連携協働に活かすことができる	1. 事前調査	1 (7%)	1 (7%)	1 (7%)	10 (67%)	2 (13%)	15 (100%)	0.004
	3. 事後調査	0 (0%)	1 (7%)	0 (0%)	6 (40%)	8 (53%)	15 (100%)	

〔認知症の人の困りごと、及び前向き姿勢に関する調査〕

自由記述の内容を質的帰納的に分析した結果、事前調査における「認知症の人の困りごと」に対するカテゴリーは、【言いたいことが上手く伝わらない】【周囲の理解不足】【納得のいく相談先がない】【生活の変化に対する不安】の4つであり、コードは33個であった。「前向き姿勢」に対するカテゴリーは、【自分から認知症だと伝える】【自分で行えることは行う】【他者の力を借りて生きる】の3つであり、コードは12個であった。

教材学修後における「認知症の人と家族の困りごと」のカテゴリーは、【自ら説明できない不安】【医療従事者の対応が不適切】【当事者理解の不足】の3つであり、コードは17個であった。「前向き姿勢」に対するカテゴリーは、【今まで通りに生活したいと必死に生きる】の1つであり、コードは4個であった。

ワークショップ後の調査では、「認知症の人と家族の困りごと」のカテゴリーは【困っていることを表現できない】【周囲の理解不足】【医療者のサポートが少ない】【自分が不確かになる不安】の4つであり、コードは18個であった。「前向き姿勢」に関するカテゴリーは、【自分のことは自分で行う】【他者の力を借りて生きる】【当事者同士で交流する】の3つであり、コードは10個であった。

〔認知症の人に使われている不適切表現に関する調査〕

事前・教材学修後・ワークショップ後調査の各2値変数について、McNemar検定を行い、その後にBonferroni補正を行った結果を表2に示した。「不穏」と「性格/人格が変わる」の2つは、事前の回答よりも学修後と事後調査の各々の回答に有意な傾向が認められた(P=0.063)。

事後調査の自由記述を分析した結果、【不穏】のカテゴリーでは不安で落ち着かない様子の9コードが最も多く、【性格/人格が変わる】のカテゴリーでは本人の言動をありのまま表現するの6コードが最も多かった。例えば、『今までと違った返答や対応・態度を取る』等の記述がみられた。また、有意な差は認められなかったが、【暴言・暴力】【徘徊】でも本人の言動をありのまま表現するが各々9コードと6コードで最も多く、『声を荒げてこぶしを繰り返す』や『家へ帰ろうと部屋を出て分歩かれる』等の記述がみられた。【介護拒否】については介護を断るが9コードと最多であった。

表2 認知症の人の人権を侵害するような用語

		適切	不適切	計	p (McNemar検定, Bonferroni補正)	
					1 x 2	1 x 3
暴言・暴力	1. 事前調査	2 (13%)	13 (87%)	15 (100%)	1.000	1.000
	2. 学修後調査	0 (0%)	15 (100%)	15 (100%)		
	3. 事後調査	0 (0%)	15 (100%)	15 (100%)		
不穏	1. 事前調査	6 (40%)	9 (60%)	15 (100%)	0.063	0.063
	2. 学修後調査	0 (0%)	15 (100%)	15 (100%)		
	3. 事後調査	0 (0%)	15 (100%)	15 (100%)		
徘徊	1. 事前調査	2 (13%)	13 (87%)	15 (100%)	1.000	1.000
	2. 学修後調査	1 (7%)	14 (93%)	15 (100%)		
	3. 事後調査	0 (0%)	15 (100%)	15 (100%)		
介護拒否	1. 事前調査	2 (13%)	13 (87%)	15 (100%)	1.000	1.000
	2. 学修後調査	1 (7%)	14 (93%)	15 (100%)		
	3. 事後調査	0 (0%)	15 (100%)	15 (100%)		
性格/人格が変わる	1. 事前調査	6 (40%)	9 (60%)	15 (100%)	0.063	0.063
	2. 学修後調査	0 (0%)	15 (100%)	15 (100%)		
	3. 事後調査	0 (0%)	15 (100%)	15 (100%)		

〔専門職や社会に求められていることに関する調査〕

自由記述の内容を分析した結果、事前調査における「専門職や社会に求められていること」に対するカテゴリーは、【チーム医療の構築】【当事者の苦悩を理解】【社会資源を増やす】【意思決定と意思表示の支援】【認知症に対する理解】の5つであり、コードは33個であった。次に、教材学修後におけるカテゴリーは、【多職種チームで当事者を支える】【当事者を理解する】【意思決定と意思表示の支援】【当事者の価値観を共有する】の4つであり、コードは25個であった。最後に、ワークショップ後のカテゴリーは、【早期診断と多職種支援体制の構築】【社会全体の認知症に対する理解】【当事者の人権が守られる社会】【地域で認知症の人を支える】の4つであり、コードは41個であった。例えば『多職種連携でその人を中心に話し合う場を作る』『症状の進行とともにサポートするケアがあることを知らせる』『専門職や社会が認知症の人に対してのレッテルを取り除く』『地域がメインとなって住民を見ていく体制作り』等の記述がみられた。

4) 考察

多職種連携コンピテンシーは、2つのコアドメインとそれを支える4つのドメインで成り立っている¹⁾。学修前とワークショップ後でアンケートをとった結果、「職種としての役割を全うする」「自職種を省みる」「他職種を理解する」の3項目については、多職種で意見交換した後のほうが事前調査時よりも得点が有意に高く、残り1項目の「関係性に働きかける」については有意な傾向が認められたことより、本教育プログラムによる学修効果が明らかとなった。有意な傾向であった「関係性に働きかける」の定義は、“複数の職種との関係性の調整や、職種間の葛藤に適切に対応することができる”というものであり、デスクッションだけでは容易に学べないと考えられた。

認知症の人の困りごとと前向き姿勢の事前調査では、【言いたいことが上手く伝わらない】という一般的なカテゴリー名であったものが、教材学修後には【自ら説明できない不安】となり、ワークショップ後には【自分が不確かになっていく不安】というカテゴリー名に変わるといふ事象が認められ、認知症の人の語りを視聴したことによって、当事者理解が深まったと考えられた。これ以外には事前・教材学修後・ワークショップ後で大きな変化は認められず、今回の研究参加者全員が認知症ケアに関わっている専門職であり、日常的に認知症の人の困りごとや前向き姿勢に触れているからだと考えられた。

人権を侵害するような用語では、「不穏」と「性格/人格が変わる」の2つは、事前の回答よりも教材学修後とワークショップ後調査の各々に「不適切」という回答が増え、有意な傾向が認められた。これらは、教材のPart2「対応に困る言動」の中で、家族が認知症の人の言動をどのように受け止めているかを視聴した後の結果であり、認知症の人の人権について思考したことが示唆された。

専門職や社会に求められていることでは、ワークショップ後に導き出されたカテゴリー4つのうち【当事者の人権が守られる社会】【地域が主となって認知症の人を支える】の2つについては、事前調査、教材学修後調査のいずれにも見受けられなかったものであり、結果に示したコード『多職種連携でその人を中心に話し合う場を作る』『症状の進行とともにサポートするケアがあることを知らせる』『専門職や社会が認知症の人に対してのレッテルを取り除く』『地域がメインとなって住民を見ていく体制作り』等、当事者の人権や地域の協力を得るといふ視野の広がりを見出すことができていた。

以上のことから、開発した多職種連携教育用プログラムの活用によって、多職種連携コンピテンシーのうち、「関係性に働きかける」という項目以外の3項目を伸ばすことが期待できること、及び専門職や社会に求められていることに関して、【当事者の人権が守られる社会】【地域が主となって認知症の人を支える】等といった視野の広がりが期待できることが明らかとなった。

引用文献

1)多職種連携コンピテンシー開発チーム著(2016)「医療保健福祉分野の多職種連携コンピテンシー」

(https://www.hosp.tsukuba.ac.jp/mirai_iryō/pdf/Interprofessional_Competency_in_Japan_ver15.pdf 2023.1.5)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 米山真理, 竹内登美子	4. 巻 26巻1号
2. 論文標題 レビー小体型認知症との診断を受けてから在宅で認知症の人を見る家族の介護体験	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本老年看護学会誌	6. 最初と最後の頁 88-95
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 米山真理, 竹内登美子, 新鞍真理子, 青木頼子, 牧野真弓	4. 巻 41巻
2. 論文標題 レビー小体型認知症者を在宅で介護する家族の体験	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本看護研究学会雑誌	6. 最初と最後の頁 935-943
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15065/jjsnr.20180322018	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 竹内登美子, 岡本恵里, 小沢和弘, 佐藤(佐久間)りか, 後藤恵子, 射場典子	4. 巻 17巻
2. 論文標題 Webサイト「認知症本人と家族介護者の語り」の構築と活用状況	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本認知症ケア学会誌	6. 最初と最後の頁 706-717
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 森田夏美, 瀬戸山陽子, 射場典子, 和田恵美子, 竹内登美子, 高橋奈津子, 佐藤幹代, 仙波美幸
2. 発表標題 健康と病の語り(DIPEX-Japan)の患者の語りから何を学ぶか Part7-患者の病を尊重できる医療者の育成のための教育プログラムを考える-
3. 学会等名 第28回日本看護教育学会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 青柳寿弥, 竹内登美子, 林浩靖, 米山真理
2. 発表標題 DLBサポートネットワーク富山の活動-研修会参加者の理解度変化と満足度の知見から
3. 学会等名 日本認知症ケア学会学術誌
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 森田夏実、射場典子、瀬戸山陽子、竹内登美子、仙波美幸、和田恵美子、高橋奈津子、佐藤幹代
2. 発表標題 交流集会：健康と病の語り(Dip-Japan)の患者の語り(ナラティブ)から何を学ぶか Part 6 - 医療者と患者・家族のより良いコミュニケーション能力の開発を目指した授業展開
3. 学会等名 第28回日本看護学教育学会学術集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 森田夏実、瀬戸山陽子、射場典子、和田恵美子、竹内登美子、高橋奈津子、佐藤幹代、仙波美幸
2. 発表標題 交流集会：健康と病いの語り(DIPEX - Japan)の患者の語り(ナラティブ)から何を学ぶか Part 7 - 患者の病いを尊重できる医療者の育成のための教育プログラムを考える -
3. 学会等名 第28回日本看護学教育学会学術集会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	岡本 恵里 (Okamoto Eri) (20307656)	富山県立大学・看護学部・教授 (23201)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	小澤 和弘 (Ozawa Kazuhiro) (20336639)	岐阜県立看護大学・看護学部・准教授 (23702)	
研究分担者	青柳 寿弥 (Aoyagi Hisami) (40622816)	富山県立大学・看護学部・講師 (23201)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関